

《授業報告》

社会科学部「社会科学総合研究（ジェンダーとセクシュアリティ）」
Teaching “Gender and Sexuality” in the School of Social Sciences

はじめに

2022年度から社会科学部では「社会科学総合研究（ジェンダーとセクシュアリティ）」を開講した。この授業を開講した背景には、本学部にジェンダーを冠した授業がないことに対して専任教員の間で危機感があつた。専任教員の退職に伴い、2019年度からジェンダーを冠した学部の授業がなくなってしまったからだ。その教員が所属していた社会科学総合系列の教員の間でジェンダー専門家の教員採用人事を計画していたが、ほどなくして新型コロナウイルス感染拡大によって教員採用人事が凍結されてしまった。だが、人事が動くことを待っては行かないと、教員有志が手弁当でそれぞれの専門領域のなかでジェンダーとセクシュアリティについて教えるオムニバス形式の授業をしようと動き出した。

個人的にもジェンダー科目設置の緊急性を強く感じるようになったのは、新型コロナウイルス感染が拡大した2020年夏から、学部の学生担当教務主任となったことが直接のきっかけである。教員や学生間の性的トラブルの報告が後を絶たず、ジェンダーやセクシュアリティについて学生が意識化する必要性をより強く感じるようになったからである。

こうして、ただちに社会科学総合系列から、社会科学部のディプロマ・ポリシーである「臨床性」・「学際性」・「国際性」を加味した内容で、一人の教員に偏ることなくオムニバス形式で行う新規授業科目を提案した。ちょうど2019年

度に社会科学部では、国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)に関連する「持続可能な開発のための社会科学」という授業を新設し、先進・専門科目の「社会科学総合研究」の授業開講に向けたプラン作りに寄与させようとしていた。おりしも、2021年3月に世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数が発表され、日本は調査対象となった世界156か国中120位と後退し、G7(先進国主要7か国)で最下位となったことも、科目設置を後押しした。

このような様々な状況を踏まえて、SDGsの中でも日本が国際的に遅れをとっているジェンダー分野を取り上げた「社会科学総合研究」が、2022年度春学期より講義科目として開講した。本稿では、この授業がどのように構成され、実践されたのか、学生たちからどのような反応があったのか、学生の提出物なども紹介しながら開講初年度の本授業の様子を紹介する。

1. 授業の構想

1.1. 授業のねらい

社会科学部にジェンダーを冠した授業を設置しようという学部教員のあつい思いをうけて、筆者が世話人となって授業の構想を練った。

まず、社会科学部の学生の特徴をふまえて、授業のねらいとして次の3つを掲げた。

- ジェンダーとセクシュアリティに関する基礎的な知識を身につける。
- 多様な社会の課題について、ジェンダーとセクシュアリティを絡めて考える視点をもつ。
- 他のメンバーとのグループワークを通して、ジェンダーとセクシュアリティについて自分の考えをもてるようになる。

社会科学部の学生は、男女比がおよそ7:3であるため、マジョリティが必ずしもジェンダーやセクシュアリティといった問題関心を持っていない。もっ

たとえば「ジェンダー」という言葉に忌避感を覚える学生すら少なからずいる可能性があった。そうした学生にこそ、この授業を受けてもらいたいという思いから、ジェンダーおよびセクシュアリティについて基礎的な知識を身に付けられる内容にしようと考えた。

そのためには、学生にとって身近なこともジェンダーとセクシュアリティに関連があることに気づき、その視点を多様な社会的課題に応用できると気づけるような授業を展開する必要があった。幸い社会科学部には、政治学・経済学・商学・法学・人文科学・自然科学など多様な学問領域にまたがる教員がおり、幅広いテーマの授業が設定されている。また、現代社会で起きている社会的課題の解決に向けて思考し、その表現方法は様々だが行動しようとする学生が一定数いることから、彼らの身の回りや関心に引き寄せて、ジェンダーやセクシュアリティを扱うことは有効だと考えた。

さらに、社会科学部には英語プログラム「TAISI」があり、海外で学校生活を過ごしてきた学生が一定数いる。彼らはジェンダーやセクシュアリティについて非常に関心が高いことから、この授業もTAISI学生が多く履修することを想定し、TAISIではよく行われているグループワークを授業方法として取り入れることにした。グループワークを通じて、ジェンダーやセクシュアリティに関心の高い学生も低い学生も、自らの言葉で語り合うことによって、感じ方の違いに気づき、相手の立場にたって物事をみられるようになれば相乗効果をもたらすのではないかと期待した。

1.2. テーマ設定

このように構想した背景には、筆者が研究している欧州連合（EU）の影響がある。ジェンダー平等が進んでいる北欧諸国がEUに加盟した1990年代半ば以降、EUではあらゆる政策にジェンダーの視点をいれなければならないとする「ジェンダー主流化」が導入された。これを参考に、社会的課題を考える際にジェンダー平等の視点を取り入れることは当たり前であると、この授業を通

して学生に発信しようと考えた。そのメッセージを学生たちが受け止めて、考えるようになれば、少しずつ社会が変わっていくのではないかと期待した。そのため、この授業にはジェンダーを専門としていない教員にも協力を仰ぎ、社会科学の中でジェンダーやセクシュアリティを身近に考えやすいテーマは何か考えた。

幸い、この科目を提案した総合系列にはジェンダーを授業で取り上げている教員が複数いたので、快く参加してもらえることになった。小島宏教授（2022年度退職、現名誉教授）は人口論、寺尾範野准教授は社会思想史、棟居徳子教授は人権法の中でジェンダーおよびセクシュアリティについて授業で取り上げていた。筆者もフランスの「パリテ」（parité）など政治における男女平等をテーマに取り上げていた。これに他系列から、国際関係論の立場でアジアにおける女性問題を教えている堀芳江教授と、途上国における女性の人身売買などTAISIで教えていた島崎裕子准教授（2022年度退職、現客員研究員）など、ジェンダー研究をしている教員が加わったことは心強かった。

他方、ジェンダーを研究テーマにしていない教員には、学際・臨床・国際の観点から必要なジェンダー／セクシュアリティの問題と、教員の専門と関連づけて説得した。例えば、学生は就職活動中にジェンダーを強く意識するようになり、企業におけるワークライフバランスに高い関心を寄せる傾向が見られる。そこで、人的資源論を教えている鄭有希教授に相談したところ、企業におけるダイバーシティとの関連でなら、ということで引き受けてもらえた。さらに、ジェンダー／セクシュアリティの意識がそれほど高くない学生を巻き込むため、言葉ではなく映像を用いて気づかせることが効果的ではないかと考え、写真や映像を用いて戦後日本社会史を研究している佐藤洋一教授に協力を依頼した。

さらに、外部講師を招いて、必要なテーマを補った。一人は、特別研究期間中の棟居先生の代講として、テレビなどでコメンテーターとして活躍されている国際人権法が専門の谷口真由美さんと、人権とジェンダー／セクシュアリティについて講演してもらった。また、学校における「隠れたカリキュラム」

(hidden curriculum) は、学生にとってジェンダーおよびセクシュアリティを経験的に理解しやすいテーマであることから、教育の観点を授業の中に取り入れたかった。そこで、ユネスコ（国連教育文化機関）の職員として教育局で長年、女子教育政策を担当し、ユネスコ・ネパール・オフィス所長を務めた菅野琴さんを講師に招いた。そして国際機関がいかにジェンダーおよびセクシュアリティの教育政策に取り組んできたか、さらに彼女自身に取り組んできた途上国における女子教育の普及について講演してもらうことにした。

こうして、社会科学の多様なアプローチからジェンダー／セクシュアリティに関する基礎的な知識を身につける授業のラインナップができた。

2. 授業の構成および方法

2.1. 授業の構成

こうして、2022年度春学期に開講した授業の概要および構成は次のようになった（下記シラバス参照）。多様な学問分野の教員に協力を仰ぐことによって、「社会思想、人権法、政治学、国際関係、地域研究など社会科学の多様なアプローチをオムニバス形式で学び」、社会科学部らしい授業の構成になったと思う。

〈授業の概要〉「社会思想、人権法、政治学、国際関係、地域研究など社会科学の多様なアプローチをオムニバス形式で学び、学生一人ひとりがいかに行動すべきか多面的、重層的に考察し研究する契機とすることを目的とする」。

〈シラバス〉

第1回4/5 ガイダンス（鈴木・寺尾）

前半：授業の説明と、担当教員の自己紹介。

後半：「性的同意ハンドブック」を作成した学生チームのメンバーによる講演。

第2回 4/12 ジェンダー／セクシュアリティと社会（鈴木・島崎）

前半：ジェンダーとセクシュアリティを学ぶ上での用語、定義、概念を理解する。その中でも、特にジェンダー化の過程「ジェンダーの社会化（gender socialization）」理論に着眼して、具体的なジェンダーの社会化（gender socialization）の日常例を考える。

後半：グループワーク「ジェンダーとは何か」を学生がアクティブラーニングを通じて感じ、自身の意識に気づく回とする。現代社会においての性（sex, gender, sexuality）の多層性とそれらをめぐる現象を理解する。そして自らが性規範（gender code）や性的役割（gender role）を無意識のなかで体现していることに気づくことを目的とする。

第3回 4/19 映像にみるジェンダー／セクシュアリティ（佐藤・鈴木）

戦後の日本社会においてジェンダーとセクシュアリティの何が問題とされてきたのか。同時代的に問題を投げかけることになった映画・CM・写真表現の変遷を俯瞰的に追い、我々が現在どのような地点にいるのかを考える。

第4回 4/26 ジェンダー／セクシュアリティをめぐる社会思想史（寺尾）

女性の性と生殖が国家と資本の論理の中でいかに語られてきたかを、20世紀の優生思想を軸に考察する。

第5回 5/10 国際人権法からみるジェンダー／セクシュアリティ（鈴木）

外部講師として谷口真由美先生を招き、セクシュアリティと人権の基本的事項について、さらにスポーツとジェンダーなどについて話を聞く。

第6回 5/17 統計からみるジェンダー／セクシュアリティ（小島）*PCルームで行う

ジェンダーとセクシュアリティに関する情報（統計を含む）に関するサイトのURLリストを配布し、主要なものについて紹介する。また、ネット上にない情報について印刷物を見ながら説明する。

第7回 5/24 企業におけるジェンダー／ダイバーシティ（鄭）

企業におけるダイバーシティ・マネジメントについて説明し、特にジェンダ

ー・ダイバーシティに関する様々な問題について議論を行う。

第8回 5/31 ジェンダーと国際機関の取り組み (鈴木・島崎)

国際機関ではジェンダーの問題にどのように取り組んでいるのかを理解するため、ユネスコ(国連教育文化機関)において途上国における女子教育の発展に取り組んでこられた菅野琴先生を講師に迎え、国連がどのような理念のもと活動をしてきたか、具体的な活動について話を聞く。

第9回 6/7 ジェンダーと政治 (鈴木)

女性の政界への進出が遅れていたフランスにおいて、その改善に向けた「パリテ」法の導入について説明し、男女平等を実現しようとする取り組みを紹介する。EUの男女平等政策についても説明する。

第10回 6/14 紛争下における女性への暴力 (堀)

今日の国際社会において紛争に巻き込まれ、難民として逃れる女性の数は増えている。紛争下において女性たちはどのような暴力にさらされるのか。そしてそれは何故なのか。平和学の直接・構造的暴力の視点からこの問題について考え、問題解決に向けての国際社会の取組について考察する。

第11回 6/21 ジェンダーと開発 (島崎)

開発学の視点から「開発とジェンダー」をテーマに学び、途上国の現状を捉える。また、ジェンダープランニングとは何か、ジェンダーエンパワメントについて学ぶ。さらに、事例では、女性の人身売買が世界のなかでも最悪の状況にある東南アジアに焦点を当て、「性の商品化」と呼ばれる人身売買の背景とジェンダーの関係を読み取る。

第12回 6/28 フィールドワーク (鈴木・島崎)

ジェンダー／セクシュアリティについて考えるのにふさわしい場所を訪問する(コロナ感染の状況によっては変更の可能性はある)。レポートを提出する。

第13回 7/5 発表準備 (寺尾)

これまでジェンダー／セクシュアリティについて学んできたことをもとに次

週2回にわたってグループ研究発表を行うため、その準備を行う。

第14回 7/12 学生によるグループ発表① (小島・島崎・鈴木・寺尾)

授業のまとめとして、ジェンダー／セクシュアリティに関する学生の研究発表を聞く。

第15回 7/19 学生によるグループ発表② (小島・島崎・鈴木・寺尾)

授業のまとめとして、ジェンダー／セクシュアリティに関する学生の研究発表を聞く。

2.2. 授業の評価方法および授業の工夫

評価方法は、オムニバス形式で担当する教員が自分の回の内容について学生の理解度を評価するため、各教員がレビューシートの提出などを求めて、それを採点して総合した。これに、フィールドワーク報告、グループワークの発表を評価対象とした。グループワークの評価は複数教員が行うため、ループリックを作成して基準を揃えた。

授業の概要の後半に記した、「学生一人ひとりがいかに行動すべきか多面的、重層的に考察し研究する契機とすることを目的とする」ことを具体化するために、授業方法を工夫した。ここでは3つの取り組みを紹介する。

第1に、授業の導入として、ジェンダーやセクシュアリティに関する課題に「学生一人ひとりがいかに行動すべきか」イメージするためのロールモデルが必要であると考え、「性的同意ハンドブック」を作成した学生団体「シャベル」に協力を仰いだ。その団体は、本学学生にジェンダー／セクシュアリティについて啓発する目的で、ハンドブックを作成する活動をその前年から行ってきた。そこで、授業初回のガイダンスに、なぜジェンダーやセクシュアリティに関心を持つようになったのか、「シャベル」の活動に至ったのか、話をしてもらうことにした。履修生にとっては、自分と同じような立場のふつうの学生が、こうした活動に関わるようになった背景を聞くことによって、この授業への動機づけが明確になったように感じられた。

第2に、「臨床性」の観点からフィールドに出てもらいたいと考え、授業の中盤にフィールドワークを1回取り入れた。その内容については、学生のフィールドワークの経験が豊富な島崎先生と相談して決めた。当初は、訪問先を指示して見学することを考えたが、コロナ感染対策で分散させる必要があったため、最終的には学生が、身近な所にあるジェンダーやセクシュアリティに関係する場所を見出すことを目的として、フィールドワーク先はこの授業に関連するところならば自由に決めてよいことにした。課題としては、フィールド調査をした証拠となるもの（自分で撮影した写真、入場券など）をレポートと共に提出させることにした。その成果については後述する。

第3に、フィールドワークの経験をもとに、他のメンバーとグループワークを通して、ジェンダー／セクシュアリティについて課題研究発表を行った。「社会科学総合研究」という授業であることから、学生に授業での学びを個々の研究に昇華させてほしいと期待し、学期末にグループワークの成果を発表してもらうことにした。そのため、授業内容に沿ってグループワークのテーマを9つ用意し、学生には調べたいテーマを第1希望から第4希望まで選んでもらい、Waseda Moodleのアンケートフォームを用いて回答させた【表1参照】。なお期限内に回答がなかった学生については、教員が割り振り、すべての履修生が1つのテーマ・グループに入って、発表を学期末にしてもらうことにした。

グループ発表の課題としては、①各テーマにふさわしい仮説を立てること、②統計を用いることを与えた。グループワークをうまく機能させるために、寺尾先生にすばらしい研究計画書ファイルを作成してもらった（メンバー、発表のねらい、リサーチクエスチョン、分担内容、リサーチに用いる文献（書籍・論文）・ウェブページ等を記入）。この研究計画書を5月下旬までに、グループリーダーに提出してもらった。それがあったので、学生は自分が何を調査しなければならないか問題意識が明確になった。また、統計を用いるため、小島先生の授業回でジェンダーおよびセクシュアリティに関する統計の探し方などを学び、そこでの学習を活かすように案内もした。

グループの学生同士が課題について議論し、他人の意見に傾聴することは、ジェンダー／セクシュアリティの問題について多様な見方を知るきっかけになると考えた。そのため学期末の授業をグループ発表の時間にあて、その他のグループ発表を聞き、学び合う環境を作った。

3. 学生の反応

3.1. 履修状況にみる学生の期待

当初は、履修生は30名程度を想定して、授業計画を作った。ところが、60名を超える履修登録があり、担当教員の間で嬉しい悲鳴をあげ、この授業が社学生にどれだけ求められていたのか実感した。同時に、想定した2倍の学生が登録したため、急いで授業計画を見直した。とくに、学生発表について、最後2回の授業時間をあてていたが、3回に増やした。

3.2. 履修生（60人）の内訳

この授業は3年生以上を対象とする先進・専門科目である。履修生は59名で、教職課程の関係で他学部生（教育学部）が1名履修していた以外は、すべて社会科学部生である。

学年別でみると、3年生が39人、4年生が16人、5年生が2人、6年生が1人であった。3年生が3分の2を占めたことがわかった。

3.3. グループワークのアウトプット

授業構成をもとに9つのテーマを挙げ、その中から調べたいテーマを各自選んでもらい、グループを構成して研究計画を立て、それに沿って調べた内容をパワーポイントにまとめて発表してもらった。各グループは5～6人で構成されている。表1にグループワークのテーマに即したグループの数と概要をまとめた。

【表1】グループワークのテーマと学生発表の概要

テーマ	数	タイトル/概要
1. 日常におけるジェンダーの社会化	2	「男女の求められる美はどのように変化してきたのか?」 「LGBTQ+の認知と理解」
2. ジェンダー/セクシュアリティと表象文化	2	「ディズニー映画からみるジェンダー観」 「炎上広告から考える『表現の自由』VS『フェミニズム』」
3. ジェンダー/セクシュアリティと歴史	1	「ディズニー映画の作品で取り上げられる女性像の歴史」
4. ジェンダー/セクシュアリティと法	1	「ジェンダー/セクシュアリティの差別は正に向けた国際的潮流と日本の法律とのズレを埋めるため、日本の法はどうあるべきか」
5. ジェンダー/セクシュアリティとビジネス	2	「ジェンダー平等実現に向けた企業の取り組み」 「日本における女性の社会進出」
6. ジェンダー/セクシュアリティと教育	1	「日本でセクシュアリティ教育を普及させる方法とは?」
7. ジェンダー/セクシュアリティと政治	1	「日本で女性の議員の数を増やすために」
8. 戦争/紛争問題と女性	1	「戦争と性被害」
9. 発展途上国における女性	1	「発展途上国の女性：家事支援外国人受入れ事業から見える実態」

学生のグループワークの傾向に関して3点指摘したい。第1に、概して学生たちはディズニーが好きで、そこに出てくるプリンセスの描かれ方に関心を持っていることが多い。今回の発表でも題材に、ディズニー映画にみるジェンダーやセクシュアリティを取り上げたグループが2つあった。それは、第2回の授業でディズニー映画を題材に「プリンセス効果」について学んだことも、学生たちの関心をより引き付けた要因ではないかと考える。

第2に、ジェンダーやセクシュアリティの表象文化を考察したグループが多かった。広告や映画など身近なところに描かれているジェンダーやセクシュアリティの課題に学生が気づいたことの現われであると考えた。谷口先生の授業で、吉野家の幹部による問題発言、自治体の「萌え」広告、東京五輪組織委員会会長の女性蔑視発言などいくつかの具体的事例をもとに人権について考えたことや、佐藤先生の授業の中で、戦後の日本映画で描かれた赤線地帯に生きる女性たちの状況について知ったことが、女性の描かれ方について問う多様な切

り口を学生たちに与えたのではないかと考えた。

第3に、企業における男女平等やダイバーシティについての学生の関心が非常に高かった。就職活動が目下の関心事である学生も多かったことから、学生たちが自分事として、男女平等や女性の社会進出について企業の取り組みを調べることができたといえる。

3.4. フィールドワークのアウトプット

社会科学部には教員と学生を構成員とする社会科学学会があり、毎年3月の卒業式にあわせて卒論研究をおさめた「学生論文集」を発行している。佐藤先生と筆者が同学会役員で、この学生論文集の充実化を図る目的から、「授業紹介」という特集を新たに組み、この授業を紹介することにした。そこで、履修者60名のフィールドワーク・レポートの中から、6名の学生たちによる力作を選び、それに筆者がコメントをつけたものを掲載した¹。

この編集作業のなかで感じたことは総評としてコメントしたので、ここではそれを引用する。「フィールドワーク・レポートから、学生たちが現代社会におけるジェンダー&セクシュアリティの問題を自ら探し出し、課題解決に向けて頭と心をつかって真摯に取り組んだことがよくわかった。それぞれ個性があって、学びの多い論文であった。」²

おわりに

本稿では、2022年度に社会科学部で開講された「社会科学総合研究（ジェンダーとセクシュアリティ）」という授業について紹介した。執筆にあたって、

¹ 「〈授業報告〉社会科学総合研究（ジェンダーとセクシュアリティ）」、早稲田大学社会科学学会『早稲田社会科学総合研究 別冊「学生論文集2022」』2023年、pp.301-316。

² 同上、p.315。

開講するまでの書類や担当教員間のメールのやりとり、学生が提出したレポート等を見返してみて、改めて社会科学部らしい授業になったのではないかと思った。とくに、授業自体を「ジェンダー主流化」しようと、ふだんジェンダーやセクシュアリティについて授業で扱っていない教員にも協力してもらった。担当してくれた全ての教員に感謝したい。それと同時に、そのことの意味を最後に考えてみたい。

筆者は世話人であったため、他の教員の授業にも参加する機会を多く得た。その分、それぞれの授業からジェンダー／セクシュアリティへの多様なアプローチの仕方について学ぶことができた。特に印象に残っているのが、第3回の佐藤先生の授業である。授業の中で、「風の中の雌鷄」（小津安二郎）、「赤線地帯」（溝口健二）や、「ナイト・オン・ザ・プラネット」（ジム・ジャームッシュ）といった映画が紹介された。学生はもちろんだが、私も初めてそれらの映像の一部を観て、女性の描かれ方や当時の男女の社会的位置について考えさせられた。佐藤先生も、学生のリアクションペーパーから大いに触発されたようだった。しかし1回しか授業がないのでどうやって学生にリプライしようか考えた末に、専門をいかして映像に収めてWaseda Moodleで共有することにした。内容は、学生のコメントすべてを紹介し、それぞれに対して表象論の立場から回答して授業の振返りをした前半部分と、それをもとに筆者と対談した後半部分の、合計2時間弱の映像を作成した。これは、映画をみたモヤモヤ感や気づきを他者と共有して、新たな気づきを得る良い経験であった。

オムニバス形式であるが、学生にとっては一連の授業であり、授業の積み重ねによって、男女の位置関係について考え方が揺さぶられたり、あるいは揺らがなかったりする。また、身近なことから課題を見つけてほしいと考えたが、身近すぎるとかえってそのことに触れたくないこともある。ジェンダーやセクシュアリティはまさにそんなテーマである。しかし、今から60～70年前の日本社会を描いた映像を観て客観視できたことは、学生にとっては意見を述べやすくなったのではないかと感じた。第3回目の授業という比較的早い時期に、

映像を通してよりリアルに感じた学生たちが、日本社会のジェンダーやセクシュアリティの問題について考えられるようになったことがわかり、嬉しかった。こういう学生とのやりとりも面白いなど、大変参考になった。

最後に、2023年度は秋学期開講とし、グローバル・エデュケーション・センター設置科目としたので、他学部の学生も履修が認められることになった。社会学らしい授業が他学部生にどのように受け止められるのか楽しみにしている。また、2024年度には社会学にとって悲願のジェンダー専門家による「ジェンダーの社会学」が開講されることになった。この授業も一つの役目を果たしたといえるだろう。早稲田のなかにジェンダーやセクシュアリティを冠した授業が多く開講されることによって、「ジェンダー主流化」が浸透することを願っている。